

よりよい社会をつくるために ～ 渋沢栄一の思いの灯 ～



「成年年齢が十八歳に引き下げ」

ある日曜日、高校三年生の私がタブレットでネットニュースを見てみると、令和四年四月一日から成年年齢を十八歳に引き下げることを内容とする記事が目に入ってきた。

（十八歳って、私ももうすぐだな。でも、成年になったからといって何か変わるの？）

私は、漠然とした疑問をもったものの、それについて特に深く考えることもなく、次の画面に目を移した。

次の日の学校。五時間目の「政治・経済」は、「社会参画」についてが授業のテーマだった。

教師「社会参画ってわかる人、いますか。」

生徒「社会に参加するってことですか」

教師「そうだね。簡単に言うところのことかな。「参画」とは、計画に加わることを意味する言葉です。そのため、『社会参

画』とは、社会をよりよいものにするための計画から参加することを言います。」

生徒「社会に参画するって大変そうですね。でも、まだまだ高校生だし、もうちょっと大人になってみないとわからないな。」

教師「でも、もう君たちはすぐ成人するんだよ。社会に出て働いてから、社会について考えるんじゃないかな。」

生徒「成人？ だって自分たちはまだ高校生ですよ。」

教師「あれ、みんなは成年年齢が十八歳に引き下げられたのを知らないのかな。」

私（あ、昨日見たニュースの話だ。そっか、成人になるって、いろいろ考えなくてはいけないんだなあ。）

「成人になること」について興味を持った私は、いろいろなことについて考えてみることにした。「成人になることでどう社会とつながるのか?」、「社会をより良いものにするために自分たちは何ができるのか?」、「将来、自分はどう行動したらよいのか?」

そんなことを考えていたある日、日本史の授業の中で、埼玉県ゆかりの人物「渋沢栄一」の話が取り上げられた。彼は現在の深谷市で農家の子として生まれた。はじめ、倒幕思想の志を抱くも、転じて一橋家の家臣となり、さらに明治維新後は新政府に仕えて大蔵省に出仕。しかし、しばらくして後、官を辞して実業家となって約五〇〇の企業の設立に関わり、約六〇〇の社会公共事業や福祉・教育機関の支援、また民間外交にも力を入れたとのことだった。

江戸末期から明治を駆け抜けた埼玉県の偉人「渋沢栄一」。何より、自分の幸せではなくみんなの幸せを願って、数々の事業を立ち上げたという栄一の生き方に、「成人になること」のヒントがあると考えた私は、彼の生き方について、調べてみることにした。

日本資本主義の基礎を築いた渋沢栄一は、天保十一年（一八四〇年）に武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の深谷市）で、裕福な農家の長男として生まれました。栄一の生家は、染め物に使う藍玉の製造と販売をしていました。父の仕事を手伝いながら、商売を通して皆が豊かになるすばらしさを学びました。商売を通じて働くことの大切さ、またお金の大切さを学んだ栄一は、定期的に代官から取り立てられる御用金に納得がいかず、代官ともめ事を起こすなど、この世の不合理に違和感を覚え、この世を変えていかねばならないと強い志をもつようになりました。

江戸末期、開国により海外の物資が日本に流入したことで、日本経済が非常に混乱していたことから、栄一は、仲間たちと共に「尊王攘夷（※）、そして倒幕こそ日本を変えられる唯一の手段」と考えるようになりました。しかし、一橋家の家臣である平岡円四郎との出会いにより、何のために攘夷を執行しようとしているのか、倒幕をすることで自分が目指すべき世になるのか、様々なことを考えるようになりました。そして、仲間の説得もあり、尊王攘夷、そして倒幕を諦め、平岡の勧めもあり、江戸幕府十五代將軍となった徳川慶喜に仕えることとなりました。

そこから栄一は、様々なことにチャレンジしていくこととなります。一番の転機

（※）尊王攘夷：天皇を尊び、外国勢力を追い払うこと。



渋沢史料館所蔵



渋沢史料館所蔵

が、パリ万国博覧会の幕府使節随員として、海外のさまざまな文化や技術を見たことでした。皆が豊かになる考え方に触れることで、社会全体を豊かにしたいという、自らの思想がまさに実現できるのではないかと自覚することができました。

しかし、栄一の思うようにはいきません。まさに、栄一が海外で勉強をしている時、日本では大政奉還が行われました。信頼してパリに派遣してくれた主君・慶喜こそが、この世を変えることができる唯一の人物と信じていた栄一にとって、とても大きな出来事でした。それでも、栄一は、海外での先進的な学びが、多くの人々を幸せするために役立つと確信していたのでしよう。明治維新の後、新政府に招かれた栄一は、株式会社や郵便制度、銀行、鉄道など日本の近代化に必要なとされるさまざまな制度を整備しました。

ところが、栄一が国の経済安定を第一と考えていたのに対して、明治政府は軍備優先を第一に考えていました。そこで、栄一は政府から離れ実業家となり、第一国立銀行を設立、その後、数百の株式会社の創立にも関わりました。さらには身寄りのない孤児や貧しい人々を保護する養育院を運営するなど福祉への取組も行い、多くの社会事業にも関わって新しい時代を切り拓く偉業を成し遂げていきました。

明治初期の一八七四年、栄一が、東京会議所の会頭を任されていたときのことで、当時は貧困に苦しんだり、病気で働けなくなったりした多くの人々が市中にあふれていました。当時、栄一が運営を任されていた養育院では、そのような貧困者や病人、身寄りのない人が、強制的に集められていましたが、ほとんどともに面倒を見てもらえない状況でした。

その状況を知った栄一は、診療施設の整備や、職業訓練所による社会復帰支援、子どもたちへの学問所の設置など、養育院の改革を進めようと思いました。しかし、「苦しんでいる人を救うのは同情や偽善」「窮民を救うことで社会になまけの風潮が生まれる」「国の財政が悪化している中で貧困者を救済することは、税金の無駄遣い」といった考えが多くの人から上げられ、栄一は養育院の廃止を迫られました。

「税金で貧しい人を助けることは、いけないことなのか。」

「貧しい人を助けることは、日本の資本主義を豊かにするためにも、必要な事業ではないのか。」

救いの手を求める人々を前に、頭を抱えていた栄一の頭に、パリで見たある光景が浮かびました。パリでは、貧困者の面倒が裕福な実業家たちの寄付によって賄われ、人々が支え合い、助け合う仕組みがあったのです。そんなパリでの光景を思い出した栄一は、そこに一筋の光明を見出しました。

「もう税金には頼らない。」

栄一は、民間資金や寄付で運営を継続することを決意します。自らが働きかけて多くの経済人から寄付を募ったり、鹿鳴館でのバザーを実施したりするなど資金を集め、養育院の存続に成功します。

その後、栄一は養育院の院長に就任しました。さらには、日本赤十字社や東京慈恵会、理化学研究所などの設立にもかかわり、社会全体への貢献として、福祉活動にも心血を注ぎました。

渋沢栄一の生涯を調べた私は、栄一がさまざまに試行錯誤しながら、社会とつながり、その社会に貢献してきたことを知った。農家の子として生まれ、幕臣となってパリに行き、帰国後、新政府の役人となるも、野に下って経営者となり、社会事業にも尽くす。私は、そんな彼の生涯と自分の未来を重ねた。

（渋沢さんはいろいろな経験をして、その経験を生かして社会をよりよいものにするために、まさに社会に参画していた。私もこれからは一人として、もっともっというんな経験を積んで、よりよい社会をつくるために社会に参画していきたい。）

今、私たちの身の回りにある様々な社会の仕組み。そんな社会を作り出した栄一の思いの灯は、今、確かに私の胸に灯っている。



渋沢史料館所蔵

コラム「渋沢栄一思想」

栄一の思想の一つに「道德経済合一説」というものがあります。これは、広く皆が豊かになる公益的な考え方としての道徳と、利益の追求を求め経済は両立させることができるという考え方です。栄一は、経済の第一義として利益の追求が第一優先とされますが、経済活動が活発に行われるためには、道徳的な考え方が必要であると考えました。「道德」を「論語」に、「経済」を「算盤」に言い換えて、その重要性を語りました。

また、江戸時代末期、士農工商という考え方が広く浸透していて、商売を行う商人は非常に身分が低くされていた時代に、「士魂商才」という考え方を提唱しました。これは、世の中で自立して生きるためには武士のような精神、「士魂」が必要ですが、そのような考え方に偏っているのは金銭的に、つまり経済面で自滅してしまうため、商人のような能力、「商才」も同時に持ち合わせる必要があるということです。

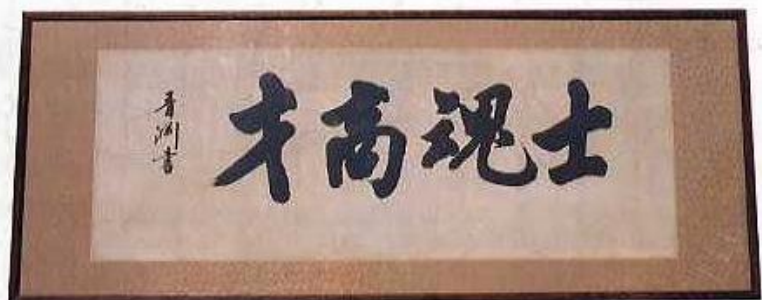
社会参画とは、単に社会貢献などに参加するだけではなく、自ら主体的に計画し行動することでもあります。そして、そのような力を付けるために、学校という場があります。卒業してから豊かな人生を送ることができるように、多種多様な学習活動による学力をはじめ、学校行事等から学ぶ協働の大切さ、豊かな心などを身に付けます。今のうちに多くのことを吸収してください。

また近年、「SDGs※1」の取組についても注目されています。多くの国や地域、あるいは学校で、再生可能エネルギーの問題や、食品ロス問題などが議論されて、実際に行動に移されています。自分のためだけではなく、多くの人のためにもなる共生社会を形成していくこと、これは公共の精神にも繋がります。

多くの企業は一人であり、利益追求が第一義の目標です。しかし、利益追求だけではなく、「CSR※2」を企業理念に掲げて、環境に配慮したり、児童生徒の学習の場を作ったりするなど、地域住民と共に企業の繁栄も考えている企業も増えています。企業はどちらを優先したらよいのか、皆さんもぜひ考えてみてください。

(※1) SDGs (Sustainable Development Goals) …持続可能な開発目標

(※2) CSR (Corporate Social Responsibility) …企業の社会的責任



渋沢栄一が埼玉県立深谷商業高等学校に来校し講演した際に残した額